

町長

ひとりごと

(45)

斉藤 讓

すきとおった光の中で、赤とである。実はこの絵は、小川台の鈴木総男さんが描いたものである。鈴木さんには私が町長に就任したときから、自作の油絵を四季の変わりごとに町長室に飾っていたといっている。

その花の形が桜に似ているところから、別名アキザクラとも呼ばれている。清楚で可憐なその美しい姿は、誰からも愛されている。このコスモスは日本古来のものと思つていたが、調べてみると意外にも原産地はメキシコで、コロンブスのアメリカ大陸発見後にヨーロッパに渡り、日本には明治の中期になつてはじめて渡来してきた比較的新しい草花のようである。

いま、町内の道端やあちこちの庭先で、色とりどりのコスモスが爽やかな秋風に揺られ深まりゆく秋を彩っている。

▼わが町長室にもいま濃淡桃色のコスモスが咲き乱れ、黄揚羽とおぼしき三匹の蝶が舞い遊んでいる。と言つても、これは実物ではなく、五十号もある大作の絵画の中でのこ

いたのですが、稲刈りで忙しくて今頃になってしまいました。ました。

鈴木さんは部屋に入ってくるなり、私にこういった。そう、鈴木さんの本業は画家ではなく、農家である。

▼聞けば、子供の頃から絵が好きで、日中は家業の農業に従事し、夜は匠磋高校で学びながらその傍で、八日市場の氏家次郎先生に師事して絵の勉強を続け、今日では画壇で

コスモス



も高く評価される存在となっている。鈴木さんの作品にはなぜか蝶のいる風景が多い。自らが選んだ光町の名勝十二景も描かれている。

鈴木さんは現在五十五歳。常に謙虚で穏やかなお人柄は、誰からも高い信頼を寄せられている。私が、わが町にこの人有りと思う人物の一人である。今後更なるご活躍を期待してやまない。

▼ところで、絵画といえども世界最大の金満市場は、日本を中心とした金満家たちによつて、異常とも思える過熱状態となつている。

かつて数年前山梨県が、県立美術館にミレーの傑作「落穂拾」を四億円で買取ったことが大きな議論を呼んだが、最近ではゴッホの「医師、ガツシエの肖像」やルノアールの「ムーランド・ド・ラ・ギャレット」の作品が一点百二十億円とかという途轍もない値段で日本のコレクターが落札したというところで、物議を醸した。資本主義経済におけるあらゆるものの価値は、需要と供給の一致するところで決まると原論はいう。しかし、それにしてもこの事態は極く一部の金満家たちの独占欲や利益目当ての不当な操作以外の何ものでもない。

芸術的評価が、途方もない札束の上で踊っている現状の姿を私は憂る。

極貧の中で農村を描き続けたミレー、そして晩年半狂乱の中で燃えるような絵を描いたゴッホは、天国からこの浅ましいとも思える狂乱振りをも果してどのように眺めていることであろうか。

▼芥川龍之助に「戯作三昧」という作品がある。これは、江戸時代の作家滝沢馬琴が、世間の中傷や家庭の煩瑣に苦悩しながら、「南総里見八犬伝」の執筆に執念を燃やし、やがて戯作者の悦びに到達する心境を書いたものである。

「この時彼(馬琴)の王者のような眼に映っていたものは利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀誉に煩わされる心などは、とうに眼底を払って消えてしまった。あるのは唯不思議な悦びである。惑いは恍惚たる悲壮の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の厳かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆる残滓を洗って、まるで新しい鉱石のように美しく作者の前に、輝いていてはならないか。

▼ミレー、ゴッホなどの芸術家の心境も、この滝沢馬琴と相通じていたことを私は疑わない。清らかに咲き誇るコスモスは、私たちに人間にいま「物欲を捨て、創造する悦びを求めよ」と語りかけているようである。